特別短編

「空を飛ぶ夢」序章

北北東

口は災いの元

六十三年もの長すぎる年月、利雄は壁のシミのような生活を続けてきた。友人からは「人前で喋るなよ」と機会あるごとに注意を受けてきた。どうも支離滅裂な言葉が世間では誤解されるらしい。それが元で混乱も起きる。職場の会議でも利雄が報告を終わると、「で、それはどういうことなの」と「結論」は喋ってしまったつもりなのに更に突っ込まれてしまう。そしてシドロモドロに陥ってしまう。頭と口が直結していないのは、もしかすると伝達経路が足先までいってから手先へゆき最後に口に繋がって言葉になるようシナプスの接続が余分な回路をこしらえているらしい、さらにそれはどこかの神経と混線しているようで、会話の発声自体がもどかしい。本人がそう思うくらいだから、周囲は大変な迷惑だ。ちゃんと完成して生まれてきて欲しかったなあ。

そんな日常の連続で、顔の大部分を占める大きな口が人生で役だったことがないと振り返る。口を開けると災いばかりがやってくる。何か主張したいときにも悶々として内に籠もってしまう。通りすがりに見た感じでも全てに消極的な奴と映ってるのは確かだった。そんな世間に対してひとりウジウジ考えながら棺桶を前にしてまで悩んでいる利雄である。

口がかなわないと人生まで左右される。職業選択も幅が狭まる。喋らなくてよいピッタリの仕事があると決めた若いころの進路・・「おっ！これは」、と選んだ職業だが・・・「〇〇で」「××▽」と一言二言で済ませられる訳がない。その無口に合った仕事に従事して何と三十八年、時々、厳しいものがあ

った。単語を並べるだけでは済まないことばかりが現実だった。相手との意思疎通もなかなか難しい。◆■★などは特に理解してもらうことが大事で、ちゃんと説明しなければならない。直接それと関係ない仕事も業務の中に入ってきた。三十八年前には想像さえできないものである。桁違いの高額な機器選定では業者との打ち合わせにも慎重さも常識も必要で、駆け引きには高い言葉の段差があった。あまり乗り気のない仕事の日々に、現実から逃げ出して、僅かに気晴らしになるのは空で友人に話しかけることだった。口は災いの元といいながら、その場を逃げ出すのはやはり口なのは不思議だった。

多忙な四十代以降はその現実逃避もかなわなかった。同級生の友人も同じで毎晩徹夜続きで趣味から遠ざかっていた。そんな毎日でお互いに忙しすぎた。やっと六十歳になって仕事から解放される日がきた。また空の会話が復活するかと期待したが友人は永久に定年が延び、無線タワーも降ろし趣味を完全にやめていた。直接会いに行っても共通の話題が見つからず話し難くなった。そんな訳でかっての友人とも疎遠になってしまう。お互いに中学生の頃からはじめた無線だ。それより現実は、楽しく実利的な職場の仲間との魚釣りや孫との遊びの方へ比重が向くのも分かる利雄だ。また引きずり込みたいのだが、しばらく放っておこうと思うのだった。

定年退職が転機

定年後、同僚との会話もなく、寂しい時間が増えると誰かと話したいと願う。そんな時不特定多数の人と会話できる安心できる場所があるというのはどうだろう。それは空の上。そこに沢山の友人が現れるというのは理想だろう。偶然に出会って交信し知り合いになって何回も会っていると長い友人のような気持ちになる。そんな訳で無口な利雄なのに口を動かしたくなる相手もある。それが独り言になると病気と間違われる。山の中の仙人であっても日常会話を維持することによって 社会性を失わないことも出来るだろう。そんな効力が無線にはある。

無線って便利

利雄にとって直接の会話は向かい風のように不自由を感じていたがやがて時代の流れで、世間のＩＴ化は彼の背中を押す追い風になった。メールでのコミュニケーションなどの手書きツールは口を介さないだけ彼の味方に見える。**目と手があれば**コミュニケーションが可能なのだからこれが一番と彼は思うのだが一方では 「無線の何が便利なの」と聞かれると辿々しくこう応えるだろう。

「空でお喋り出来ることは家に居ながらにして井戸端会議が出来る当に本当の井戸端ツールだろう」ってね。メール仲間やメーリングリスト仲間からの便りは、目がちゃんと画面を追うことが出来なければ返事が出来ないが、無線はマイクを握ればそれで済むのだ。**耳と口があれば**大丈夫。時間と周波数を決めて会話すれば安否確認にもなると言う。だが問題は肝心の言葉が通じなければ何にもならない自らの言葉の矛盾に気づかない利雄でもある。物事は収束と分散、構築と破壊と最構築の繰り返しなのだ。この世は スクラップアンドビルドの世界だ。何

が起こってもそれは途上の一形態にすぎない。　利雄の言葉自身が破壊される側にいたり創り上げる側にいたり、振り子のように宙ぶらりんなのは滑稽でもある。

補聴器の無線家

海ベタに住む林田太郎さんは７０歳、昔から電信での交信を楽しんできた。病院内で見掛ける林田さんは補聴器に白い手袋に持つ杖がトレードマークだ。毎日病院通い。周囲との会話も少なく、リハビリが済んだらバスを待つ。それでもって自宅近くのバス停で降りる、今朝も６時には対岸の長崎市の局と定時交信を終えた。和文電信で「おはよう。今日も元気ですか」の定型文から始まる。「りょうかいしましたはやしださんあなたの信号（強度と了解度は）は５９９」何時もの内容にニコリと笑みがこぼれる。「きょうは暑くなりそうです。ご用心。じゃあまた明日　しつれいします。さようなら７３」と打ち終えてお茶が飲みたくなって畳の上の卓袱台においた無線機の電源を落とす。それから朝食時間となるのが日課だ。食事を終えると午前８時のバスで病院へ出掛ける手順はこの十年変わらない。同居の奥さんのひばりさんは共に同じ歳で五十年一緒に暮らしているが、奥さんとの会話は大声でけんか腰に端からは見える。だが相思相愛の仲、補聴器からは、いつもピーという独特のハウリング音が漏れてやかましいが・・それも同居人としてもう慣れてしまった。

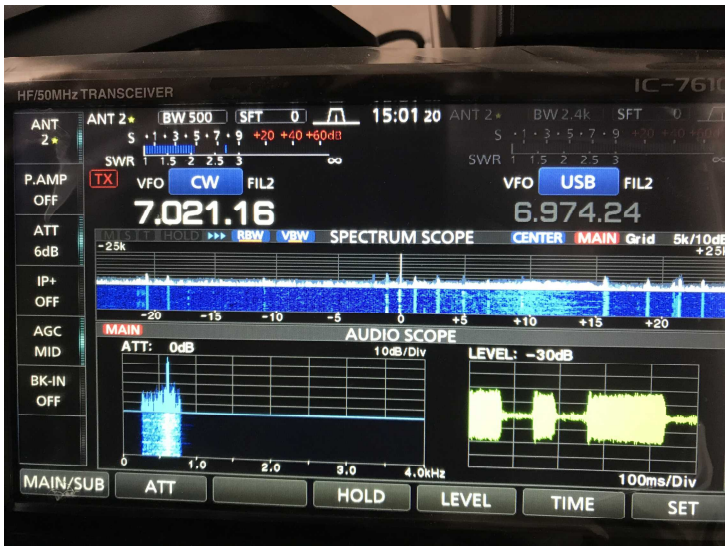
「あんたとは無線で会話したほうが通じるごたるね」と奥さんは言うが林田さんは何のことかと「はあ」で終わる。最初から奥さんの声は耳に入らないようだ。「今日はどうだったね」長崎の相手の事を尋ねているのだが「うんボチボチたい」どうやら自分の体の具合を聞かれたのかと勘違いしながら返事していた。補聴器ではトンとツーの２通りはきちんと理解出来るが、言葉となるとさっぱりだ。

わくわく感

わくわく感は初めて電波を出した中学生の頃。高校時代、遠くの地と１Ｗでの交信。初めて車に乗って電波を出した日。田井の島付近で２Ｗの出力で１３０㎝ほどのホイップアンテナでアルゼンチンと交信した日。・・そんなわくわく気分は初めて電波を出した日と一緒だ。還暦過ぎて再び制限なく夢中になれるというときにはあの「わくわく」感はもう遠ざかってしまったような気持になっていた。だが・・台風接近の中のその十分後には人生で何度目かのワクワクする気分を楽しむことになるのだった。ただ気がかりなのは、世界のコンテストに立ち向かうにしては、高利得のアンテナやタワー、ハイパワー局が頭に浮かぶ。対して我が庭のどんぐりの枝に引っかけた銅線とせいぜい１００Ｗの無線機で、なかなか太刀打ちできないだろうことは承知しながら、さてとダイヤルを回してみる。コンテストは特別環境なのだ。聞こえる相手局には私の微弱な電波も届くはずなのだ。でも相手にしてくれないだろうという心理的先入観だけが立ちはだかる。事を始めるときに先入観で決めてかかるのは愚かなことである。微弱貧乏局を侮るなかれ。そう気を引き締めて 突進するしかない。

そしてコンテスト

１０月にはＳＳＢ（Single Side Bandの略）での世界的コンテストが週末２日にわたって行われた。利雄は参加は、はじめは難しいなあと思って気にもしなかったが。台風のおかげで折角の閉店休業状態、じゃあ思い切ってやってみるかとダイヤルを回した。外を見ると台風の影響か森の枝が揺れている。同時に木の枝につるしたダイポールが上下に切れそうに揺れている。そんなアンテナを使って参戦を決めた。目標は１００局。まさかこんな貧弱な装置とアンテナで１００局交信するなんてまともではなさそうに思えたが・・コンテストは如何に微弱な電波を受信出来るかが鍵となるものだ。世界の屈強な巨人は鯨だけでなくメダカだって見逃さないらしいそのメダカになって電波の空に旅立ったのである。おかげでアフリカを除く５大陸９３局と交信して時間切れになった。あと目標の７局は寸前だった。小さな闘いは終わった。



飛び道具とアンテナ

定年を迎える頃になると風が吹く度に、高いアンテナを下ろせる体力は既にない。朽ちるタワーのことを思えば今更アンテナ建設は考えないことになる。せいぜいホームセンターから４ｍ程度の長さのモノ干し竿を買ってきて逆Ｖ型ダイポールをささやかに作るか、小型の短縮コイルが入ったグランドプレーンをあげるくらいだろう。

もし、家の周りに木があれば高い位置の木の枝に小石を結んだ細いナイロンロープをクルクル回してよい打ち上げ場所で手を離して、うまく高い枝に引っかけることが出来れば、その下にダイポールアンテナのバラン部分を結わえつけて、反対側のロープを引っ張るとあれよあれよという間に逆Ｖ型ダイポールが出来上がる。それを使って何処まで飛んでいくかという期待につながる。これはオリンピックのハンマー投げを小型化したスポーツに似た世界だ。決め手はアンテナを高く上げるためにある程度重量のある石付きナイロンロープが上手に枝を越すこと・・そして作ったアンテナで遠くの局と交信するという二段構えのワクワク感を体験出来るのである。

ハラハラドキドキ

言葉が通じた時の喜び、全く通じなかった時のショックと嘆きを知るというのもハム故のドキドキ感だろう。お隣の韓国の局とは交信しようと思えばいつでも可能だが、相手は時々日本語が理解出来る人もいて、日本語の電信でホレと叩いて和文を送ってくる達人もいる。だが英語も片言で利雄を同レベルで何と言ってるかさっぱり分からない人もいる。千差万別だ。中に

は日本の局で韓国語やらタイ語などの達人もいて、早口での応答には感心する。インドネシアやフィルピンでは訛りがすごい英語もある。ハラハラドキドキはどこにも転んでいる。勿論利雄の言葉がどこでも通じるはずもないのだがいつも度胸だ。やるかやらないかの二つに一つ。国際交流はここから始まる。一人いい気になっているとそこには、妨害者はいつも付き物だ。まず第一に、耳元に朝から喧しい声が聞こえてくるのだからたまったものじゃない。「ああたは朝早くからから何ばしよっとね」と林田さん宅と違って百合子奥様の雷がまず落ちてくるのは間違いない。

オンエアミーティング

曜日・時間、周波数を決めて空の上で会うことを オンエアーミーティングという。いつも言い出しっぺの利雄が、周波数を３０分ほど前から確保。出来れば、ここは誰も使って欲しくないのだ。だって約束の周波数にみんな集まれるように、しておかなければ、何処でミィーテイングが出来るのか分からないし今日は開くのだろうかと混乱してしまう。だが電波の周波数は私有物ではないから誰が使っても文句は言えない。その時の対処法も考えておかねばならない。一緒に参加して、事情を話して時間が来たら使わせてもらうことなど、簡単そうだが、いろんなリスクも抱えている。

だが一番のリスクは当日予定時間になっても誰も出てこられない場合だ。利雄は一人「どなたかお相手よろしく」と通りがかりの方に一人でも参加して貰いながら次第にメンバーが揃ってくるのを待つ。 そうして ４人も集まれば大成功だ。一時間でお開きになるが、みんなの声が聞こえる時、まさにお空での井戸端会議の始まりだ。無線の話しそっちのけでペット自慢やら、忙しさ自慢が始まる。・・そうしてお開きになるとシーンとなる。また来週元気な声が聞こえることを祈りながらスィッチを切る。これもまたワクワク感だろうか。

仲間内で徒党を組むというグループもそれなりに共存や信頼意識があって楽しいかもしれないが、時には。孤高で自己目標へ向かい、例えば1日1局の方と心を込めた交信を行うとか、いろんな形態を楽しむのもよいだろう。無線の話題は勿論、シニアなりの物語を楽しむこともあっていいのではないか。例えば、昔の暮らしや遊びを披露したり、かくれんぼで屋根に上がって怖い爺さんに叱られた思い出などいろんなお話が行き交う。まさか無線での話かとふと振り返ったりする内容もあってその形態は自由である。　こんな風に楽しむアマチュア無線、もう少しファンが増えないかなと思う今日も口下手な利雄だった。

つづく